

新校舎建築委員長ハロルド・ウォレス・ハケット氏 神戸女学院岡田山キャンパス造営におけるもう一人の恩人の記録

井 出 敦 子

1. 図書館本館の螺旋階段とハケット氏

神戸女学院岡田山キャンパスは、当時の第5代院長デフォレスト Dr. Charlotte Burgis DeForest (1879-1973) の高邁なる理想と、それを形にしたヴォーリズ Dr. William Merrell Vories (1880-1964)、二人の魂が響き合って実現した。そして、建築委員長としてこの大事業を実務的に支えたのが、学院



写真1 建築現場を視察するデフォレスト院長とハケット氏

の財務主管をしていたハロルド・ウォレス・ハケット Mr. Harold Wallace Hackett (1894-1958) である。彼はアメリカンボードのジャパン・ミッションに

おける財務責任者も兼ねていた。

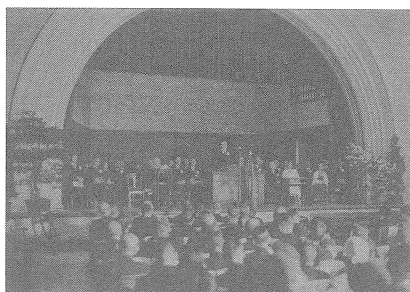


写真2 1934年4月18日に举行された
新校舎の献堂式で報告を行うハ
ケット氏

ハケットは1894年8月25日にウィスコンシン州で生まれ、ベリア・カレッジ(ケンタッキー州)を卒業後、コロンビア大学のビジネスコースで学び、1920年に来日した財務のエキスパートであった。デフォレストはハケットを「彼の手は経済恐慌の時も、経済発展

の時も、同じように神戸女学院を安全に指導した」と評していたことが、『神戸女学院百年史 総説』に記載されている。

新校舎の献堂式でハケットが報告した内容は同窓会誌『めぐみ』第24号(1934)に「建築委員会報告」として全文の訳が掲載されている。その中で、建築委員が建築意匠に織り込もうとした美術的要素について次のように述べている。

例へば屋上に壺形の飾を附けたり、屋根の角に特別の飾を施したりした外、モザイクの外壁、外部の電燈器具、講堂正面の風致等、その他天平時代の日本美術の趣を見せたる圖書館閲覧室の天井、同じく圖書館の中二階から屋上展望臺へ通ずる累線階段等である。此の累線(ママ)階段はリンコルの「権勢への途は曲りくねれる階段なり」との名句を思ひ起させる

委員長のハケットそして院長のデフォレストを含む5名の委員のうちの誰がどういう提案をしたのかは明らかではないのだが、図書館に螺旋階段を設けるよう指示したのはハケットであるという話が伝わっている。リンカーンの言葉を真理探究におきかえ、「真理への途は螺旋階段を上るが如し」という精神を象徴するものとして^①。

1941年、ハケットは日米関係の悪化に伴う退去勧告を受けて帰米した。神戸で生まれ、岡田山で多感な時期を過ごした彼の息子たちもまた、それぞれの形で日本との関わりを持つことになる。長男ハロルド・ウォレス・ジュニア Mr. Harold Wallace Hackett, Jr. は、日本人に銃口を向けることはできないと、良心的兵役拒否を選択した。教員、ライブラリアンそして詩人でもあった^②。次男ロジャー Dr. Roger Fleming Hackett は、米国における日本学の権威として今もミシガン州に健在である。

終戦後再び来日したハケットは、国際基督教大学の創設に財務担当者として関わる。同大学の初期の校舎の設計にはヴォーリズも参加している。ハケットとヴォーリズは時を経て再び協働する機会を得たのである。

1958年に召天。神戸女学院では学院葬を行って日本への伝道にその生涯を捧げた恩人を追悼した。

葬儀の日、壇上には本学院の美術教師であった長尾 己画伯の手になる若き日の彼の肖像画が飾られていた。それは今、図書館本館ギャラリーにある螺旋階段の傍らに掛けられている。

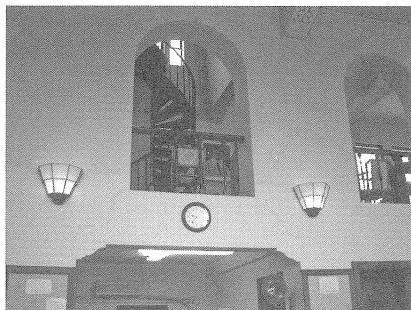


写真3 図書館本館閲覧室からギャラリーの螺旋階段を見上げると右側にハケット氏の肖像画が見える

2. ロジャー・フレミング・ハケット氏からの祝辞

ロジャー・フレミング・ハケット氏は、ハロルド・ウォレス・ハケットの次男として1923年に神戸で生まれ、1940年にカナディアン・アカデミーを卒業して離日、カールトン大学(ミネソタ州)に入学、日米開戦により学業を中断してコロラド海軍日本語学校へ、海軍第一師団通訳官として沖縄で終戦を迎えた。カールトン大学に復学し、卒業。ハーバード大学大学院でE.O. ライシャワーに師事。東京大学大学院歴史学科に留学。1961年ミシガン大学に奉職。同大学歴史学部長、日本研究センター所長などを歴任し、1993年に退職、現在ミシガン大学名誉教授。

学院では、2013年に岡田山キャンパス移転80周年を迎えるにあたって、同氏を招いて記念講演をお願いすることを計画したが実現に至らず、9月中旬、ビデオレターによる祝辞(英語)が、貴重な資料とともに学院に届けられた。

「祝辞」は、記念行事に先立って10月4日(金)に大学のアセンブリーアワー(金曜日公開プログラム)で学生・教職員及び来場者に公開され、10月12日(土・創立記念日)にはシンポジウム終了後、茶話会会場に隣接した教室で繰り返し上映が行われた。

〈ビデオレターの概要〉

私はロジャー・ハケットです。神戸女学院岡田山キャンパス移転80周年記念をご一緒にお祝いできることを大変うれしく思います。私がこの特別な機会を特にうれしく思うのは、私の父が、今日においても日本で一番魅力的で美しいといえるキャンパスの造営事業に

建築委員長として関わっていたからです。私は(神戸時代に)父がよくヴォーリズ博士と一緒に帰宅して、昼食だったか、夕食だったか、食事のあとも新しいキャンパスに関する話し合いを続けていたのを覚えています。



写真6 当時一家が住んでいた
宣教師館^④

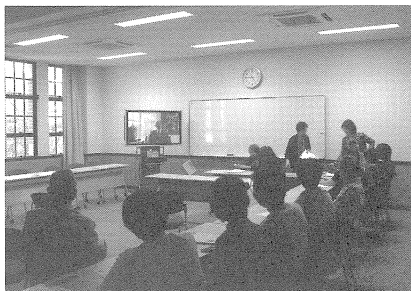


写真4 エミリー・ブラウン記念館での
上映会の様子

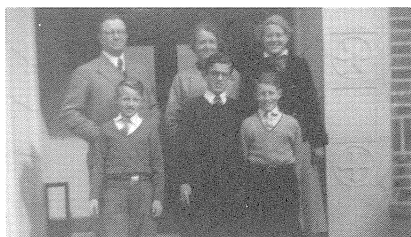


写真5 移転後間もない頃の総務館
玄関での家族写真

キャンパス造営は困難な事業でしたが、渡り廊下が特徴的な素晴らしいキャンパスが出来上がりました。父はこの仕事に大きな喜びを感じていましたが、私は引っ越しによって通っていたカナディアン・アカデミー^③が遠くになってしまうので喜んでばかりいたわけではありませんでした。

しかし、岡田山に来てみたら、自転車で丘を下って阪急電車の駅まで行くのはとても楽しいことでした。神戸女学院の休日に体育館で兄弟や近所の外国人の子供たちとバスケットボールをして遊んだり、甲子園球場へ高校野球の応援に行ったり、またよくテニスをしました。岡田山は私たち家族にとって、とても居心地のよいところでした。



写真7 自転車通学

続いて、時間の関係で上映会ではカットした部分、お父様が日米関係の悪化により日本を退去されたこと、戦後日本に戻り、国際基督教大学の設立に関わられたこと、そして自身の経歴が語られている。



写真8 中庭での家族写真

こちらについては、調査を重ねたうえで改めて報告することとしたい。

父と私の人生には実に興味深い類似点があります。父は日本で為すべき業を続けました。私は日本研究を続けて来ましたし、続けています。日本は父と私にとって人生の重要な一部分なのです。80周年記念へのお招き、どうもありがとうございました。

3. 故ハロルド・W・ハケット氏追悼式

国際基督教大学の基盤整備に携わっていたハケットは病を得て帰米、1958年1月5日、ハワイにおいて召天した。学院では訃報を受けて1月17日に追悼式を執り行った。(その様子を伝える院長室のアルバムには「学院葬」と記されている。)今回ビデオレーターとともに届けられた、時代を経て保存されてきたのであろう

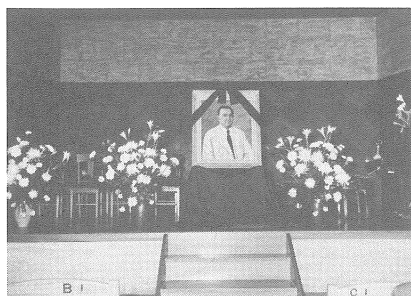


写真9 ハケット氏の学院葬

「追悼式」のプログラムと、同日の様子を夫人に伝える当時の第7代難波紋吉院長の手紙の写真からは、父親の仕事を誇りとし、日本の思い出を大切に

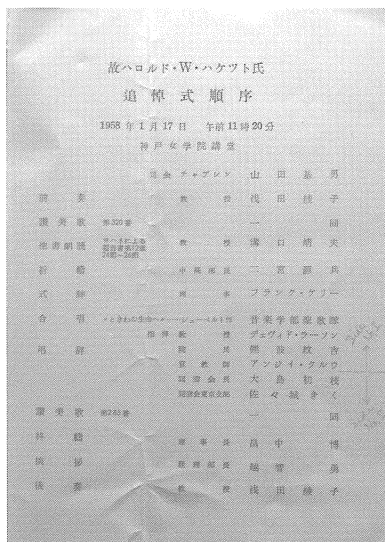


写真10 故ハロルド・W・ハケット氏追悼式順序

しているロジャー・ハケット氏の気持ちが伝わってくる。特に手紙については現時点でその写しの所在が確認できていないものであることを考えると、学院は本当に貴重な資料を得たと言うことができる。

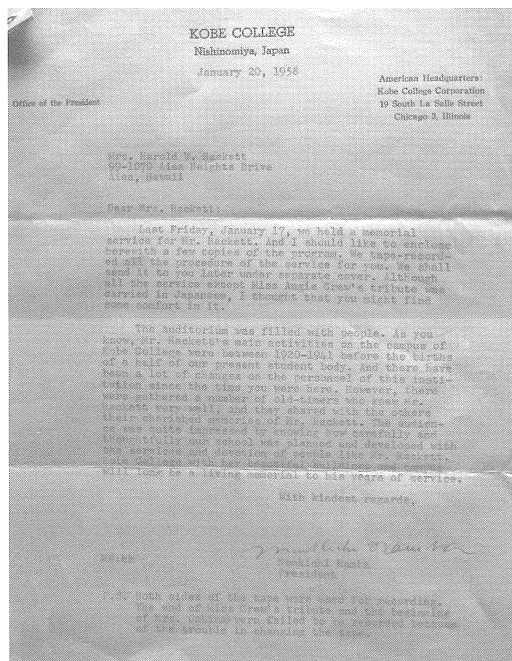


写真11 学院での追悼式の様子をハケット夫人に知らせる難波院長の手紙

難波院長の手紙の本文を訳出しておきたい。

〈1958年1月20日付 難波紋吉院長 から
ハワイの Mrs. Harold W. Hackett 宛書簡〉

1958年1月20日

親愛なるハケット夫人

先週の金曜日、1月17日に、神戸女学院ではハケットさんの追悼礼拝を守りました。プログラムを何部か同封します。式の一部始終をテープレコーダーで録音しましたので別便で送ります。アンジー・クルー氏の弔辞以外はすべて日本語ですが、お悲しみを少しでもお慰めすることができればと思います。

講堂は参列者で一杯になりました。ご存じのように、ハケットさんの学院でのお働きは1920年から41年までですから、現在の学生・生徒の半数が生まれる前のことになります。そして、学院の教職員の顔ぶれも随分変わっています。しかし、ハケットさんのことをよく知る古参の方々の、大切にしてきた思い出をみんなで分かち合うことができました。参列者は、神戸女学院がハケットさんのご尽力と献身によって、いかに綿密で行き届いた配慮をもって計画され運営されてきたかを知って感銘を受けました。神戸女学院とその美しい校舎とキャンパスは、ハケットさんの長年にわたるお働きの記念碑として長く伝えられていくことでしょう。

敬具

院長 難波 紋吉

ハケットと夫人のアンナ・パウエル・ハケット Mrs. Anna Powell Hackett (1891-1960)の墓所は、マサチューセッツ州ニュートンの Newton Cemetery and Crematory にある。ところが今回、遺言によって遺骨の半分は日本に送られ、国際基督教大学に保管されているとの情報がもたらされた。同大学に問い合わせたところ、東京都八王子市にある上川霊園内 ICU 墓所の二人目の納骨者であるという回答を得た。

奇しくも、神戸女学院岡田山キャンパス移転に関わった3人のアメリカ人、日本生まれの院長は仙台で、後に日本国籍を取得した設計者は近江八幡で、そして建築委員長は今も日米の懸け橋として北米東部と東京で眠りにについていることになる。

註

- ① 英国の思想家フランシス・ベーコンの "All rising to great place is by a winding stair." という言葉もじつて、米大統領となったアブラハム・リンカンーンが "All roads to power are by a winding stair." と言ったのを、さらにハケットが引いて "The road to truth is by a winding stair." と、真理探究を担う図書館の屋上へと登る階段を螺旋階段にするよう指示したのだ、という話が図書館に伝わっている。
- ② Harold Wallace Hackett, Jr. (1921-1980)の資料は、スワースモア・カレッジ(ペンシルベニア州)の Swarthmore College Peace Collection に収められている。
- ③ カナディアン・アカデミーは、1913年に神戸市灘区長峰台に創立されたインターナショナルスクール。1991年に六甲アイランド(神戸市東灘区向洋町)に移転し、旧キャンパスのヴォーリズ設計の校舎は現存しない。
- ④ 神戸女子神学校(神戸女学院の創立者でもあるジュリア・エリザベス・ダッドレー Miss Julia Elizabeth Dudley (1840-1906) と、マーサ・ジェーン・バローズ Miss Martha Jane Barrows (1841-1925) が1880年に神戸女子伝道学校として創立した)の敷地内(現在の関西学院西宮聖和キャンパス)にあった宣教師館。ヴォーリズの設計により1933年3月に竣工した。一家が居住するようになったのは1934年の夏ごろからではないかと考えられる。1980年代に聖和幼稚園園庭に移設され、広島英和女学校(現在の広島女学院)に保姆師範科(後の聖和女子学院の源流の一つ)を設立したナニー・ベット・ゲーンズ Miss Nannie Bett Gaines (1860-1932)を記念して、ゲーンズハウス Gaines House という名前がつけられている。(西宮市都市景観形成建築物)

附記 ハケット氏の事績を辿る曲がりくねった階段

図書館本館のギャラリーで螺旋階段を見上げながら、岡田山キャンパス造営にまつわるいろいろの記録を辿る糸は既に断ち切られているとしか思えず溜息をついていた頃のことを思い出す。その糸の繋がる先に希望を与えてくれたのが、2004年4月の内藤^{よし}能氏(神戸女学院中高部・大学英文学科卒業、大学院文学研究科英文学専攻通訳コース修了、現近畿大学文芸学部教授)との出会いであった。当時図書館員として、同年新設された通訳コースの第一期生への図書館ガイダンスでいつものように螺旋階段の話をしたところ、思わぬ反応があったのだ。「ハケットさんの息子さんを知っている。」その声の主、ミシガン大学でロジャー・ハケット教授の授業を聴講していたことがあるという内藤氏との情報交換によって何かが動き出したという予感の中、埋もれていた写真が見つかり、傷んだまま放置されていた肖像画を発見して修復し、院長室のアルバムで召天に際して学院葬が執り行われていたことを知るに至った。一方、2012年11月17日(土)の神戸女学院秋季公開講座で、内藤氏が「コミュニケーションー出会い。岡田山を想うあるアメリカ人」と題してハケット一家のことを紹介して下さったことが、キャンパス移転80周年記念行事へのロジャー・ハケット氏招聘を考えるきっかけとなった。2013年9月、渡米してミシガン州に同氏を訪ね、ビデオを収録し、資料の写真とともに学院に届けて下さったのも内藤氏である。神戸女学院でのハケット氏の事績を辿る作業の実に多くを内藤氏に負っていることをここに記して感謝の意を表したい。

ロジャー・ハケット氏は、ご父君が精魂傾けて実現なさったキャンパスが移転80周年を迎えたことを祝って、温かいメッセージと大切に保管なさっていた貴重な資料を提供して下さった。

学校法人関西学院聖和短期大学教授の小見のぞみ氏、キリスト教教育主事の吉新ばら氏に、ゲーンズハウスを丁寧にご案内いただいた。本学院のテニスコート越しに見えていた風景がいつしか変わっていたので、宣教師館は取り壊

されたのだろうと勝手に思い込んでいたのは不明であった。これを機に、交流を深めていくことができればと思う。

国際基督教大学アドヴァンスメント・オフィス献学60周年記念事業事務局長の中村正子氏には、ハケット氏の遺骨の所在に関する調査にご協力いただいた。また、その過程でハケット氏と直接交流のあった方々の存在が明らかとなった。今後聞き取りを含めた調査を続けていきたいと願っている。まだまだ曲がりくねった階段の、その先が見通せるところには到達していない。

多くの方々のご厚意のおかげで本稿を起こすことができたことに、改めて御礼を申し上げる。

なお、「図書館本館の螺旋階段とハケット氏」は、キャンパス移転80周年記念誌『神戸女学院岡田山キャンパス—ヴォーリズ建築の魅力とメッセージ』に収録されたコラムを加筆・修正したものである。

また、古写真の所蔵は以下の通りである。

写真 1～2 ： 神戸女学院図書館所蔵

写真 9 ： 神戸女学院院長室所蔵

写真 5～8、10～11： Dr. Roger Fleming Hackett 所蔵

(院長室課長)